

ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究 — 大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに —

會田 宏¹⁾ 船木浩斗²⁾

Qualitative study of practical wisdom in handball coaching through narratives of a young coach who directed a top-level college team

Hiroshi Aida¹⁾ and Hiroto Funaki²⁾

Abstract

The purpose of this study was to study practical wisdom in coaching, and how it relates to enhancing competitive ability in ball sports. To this end, an interview was conducted with a young coach who directed a top-level college handball team. The following aspects became clear upon qualitatively analyzing his narratives on planning, executing, and assessing game plans from a phenomenological perspective:

- 1) When designing a game plan, a satisfactory result cannot be expected unless an effective strategy is planned and prepared by taking into account the opponent's predicted response to the strategy.
- 2) The desired automation of team strategy in ball sports involves considering movements and ball handling as a loosely followed rule, prioritizing a player's judgment in individual play situations, and for other players to work in coordination with the player.
- 3) Although persisting in one strategy enhances the achievement of strategy objectives, it does not necessarily enhance the team's competitive ability in the game as a whole.

Key words: interview research, phenomenological perspective, game plan, automation of team strategy
インタビュー調査, 現象学的態度, ゲーム構想, チーム戦術の自動化

I. 緒言

1. 球技におけるコーチング活動

球技における競技力は、戦術の有効性と戦術の習熟性の積としてモデル化でき、有効な戦術を常に高い習熟レベルで実行することがトレーニングの長期的な目標になる(會田, 1999)。しかし、準備期または試合期においては、チームを指揮する指導者は、対戦相手と自分のチームの競技力を比較し、戦術を変更・修正し、戦術の有効性を向上させることで競技力を高めるのか、戦術を変更・修正せずに自分たちの戦い方をさらに徹底させ、より高い習熟性を目指すことで競技力を高めるのかを、残りのトレーニング時間を考慮しながら決断してコーチング活動を行わなければならない。球技におけるコーチング活動は、このように、指導者のきわめて高度な創造的な能力が要求される最も

実践的・包括的な活動である。具体的には、チームおよび個別の選手を対象としたトレーニングにおける目標の設定、手段の準備、計画の立案、活動実践、活動評価といった一連のサイクルの実践への適応が、コーチングにおいて高い成果をあげるために重要である(図子, 2010)。

2. 球技におけるコーチング活動の知を研究する意義

コーチング活動に関する研究では、実践現場に有用な知見をもたらすことを目的として、さまざまな実践的、理論的な研究が行われている。球技では、ゲームパフォーマンスを数量化する分析手法を用いて、コーチング活動の成果(結果)について検討している研究(藤本ほか, 2009; 長野ほか, 2010; 田中ほか, 2010)が多い。しかしそこでは、現場のリアリティが反映される研究成果や現場の問題を合理的に解決できる研究

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科

University of Tsukuba, Graduate School of Comprehensive Human Sciences

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程

University of Tsukuba, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Master's Program

成果は、あまり提供されていない。例えば、スコアによるゲーム分析を行い、「攻撃成功率が低い」「ミス率は低く抑えられている」「シュート成功率が低い」という結果が得られた場合(會田ほか, 1996), ミスが少ないことはよいが、シュート技能そのものに問題があると評価することもできるし、ミス率が低いのはリスクを背負わずにプレーしている結果であり、有利なシュートチャンスを作り出せない攻撃展開に問題があると評価することもできる。どちらの評価を行うかで、チーム強化に向けた次のトレーニング目標は全く違うように設定されてしまう。

これらのことは、コーチング活動の充実およびコーチング学の発展に有用な知見を導くためには、コーチング活動の成果(結果)だけではなく、指導者のコーチング活動実践そのものを科学的に研究すること、言い換えれば、指導者が、どのように現状を捉え、どのような目標を設定したのか、計画・実施したトレーニング活動をどのように評価したのかといった、指導者の思考・決断過程を含めたコーチング活動の知を科学的に研究することの必要性を示唆していると考えられる。

3. コーチング活動の知への科学的アプローチ

現場の指導者の持つこのような知は、臨床の知あるいは実践知と呼ばれ、地域的、文化的、歴史的な特殊性を持つ知識であり(中村, 1992, pp.129-130), 個人的、経験的な知識、柔軟で不定形な知識(ベナー, 2004, p.178)である。また、コーチングにおいて直面する問題の多くは、個別的で、複合的で、再現性に乏しい(村木, 1991)ことから、普遍性、論理性、客観性という3つの原理を武器とした自然科学の手法(中村, 1992, pp.8-10)は、経験がものをいうこの領域を正当に扱えない(中村, 1992, pp.132-133)。さらに、現場の問題には、必ず個別の歴史的・文化的・生活的な脈絡がからみついているため、実験的あるいは調査的にニュートラルな場を設定できないこと(浜田, 2010)、現場は複雑な相互関係が網の目のように入り組んでいる場であるため、細分化して数量化すると、生の実相のもつ豊かなアクチュアリティーを「厳密性」と引きかえに断片化してしまうこと(鯨岡, 2005, p.21)、実践の世界は理論モデルで把握されるよりも常に複雑であること(ベナー, 2004, p.163)は、コーチング活動の知を研究する手法として自然科学的な手法がなじまないことを示している。

4. コーチング活動の知を科学する際の問題性

近年、自然科学的な手法などの方法論に限定されない形で、コーチング活動そのものを対象にした研究が行われるようになってきている。それらは、指導者が自らのコーチング活動を振り返って内省し、記述・報告している研究(吉田, 1993; 箕輪, 2007; 濱田, 2009; 井上・杉山, 2009)、指導者および選手の内省と数量化したゲーム分析結果を総合している研究(吉田, 1996; 水上ほか, 1999; 三浦ほか, 2009)、チームの活動に直接参加していない第三者の視点から考察する研究(藤林, 1997; 吉井, 2010)などである。

西條(2007)は、体験者の「内的視点」からの記述は、読者がそのやり取りを追体験する形で少しずつ理解を深めていけると指摘している。また、浜田(2007)は、「<生きるかたち>を渦中の視点から記述し、たぶんに錯覚をかかえた日常の見かけをそこから捉えなおすことができるのなら、それもまた十分に意味のある学の営み」と述べている。さらにNicholls et al. (2005)は、意味を把握するには、行為者の世界の内部に入り、行為者の立場から世界を眺める必要があると指摘している。これらのことは、指導者が自らの内省を手がかりにコーチング活動の実践知を明らかにするという研究手法の有効性を支持するものである。

しかし、内省的な手法を用いた先行研究では、実践したコーチング活動を分析する前段階において、それを外化(山崎・三輪, 2001)する手続き、すなわち自分の思考を可視化でき、客観的に思考を見つめ直せるように文章や図表に表す手続きが行われていない。西村(2001, p.209)は、経験しているが、意識や自覚ができずにいる前意識的な層の営みは、語りを手がかりに分け入ることができると指摘している。野口(2005)は、語ることによって、さまざまな出来事や経験や意味が整理され配列しなおされて、ひとつのまとまりをもつようになると指摘している。長岡(2007)は、スポーツ場面で生じる現象を、本人が認識できる水準以外の異なる水準で捉えることは、スポーツを対象として事例を用いることの独自性になりうると指摘している。西村、野口、長岡の指摘は、コーチング活動の知を分析する前段階の手続きとして、それを語りによって外化しておくことによって、実践の説明と解釈の精度を高められると同時に、他の研究者や実践者の反証可能性を担保し、開かれた省察への手がかりになる可能性が生まれてくることを示唆していると考えられる。

5. 実践知・臨床の知としてのコーチング活動を研究する手法

実践知のような、量的な指標が存在しないものを対象とした研究に、質的研究がある（無藤ほか, 2004, p.3）。質的研究の利点は、調査された人々の考えや体験、またその行動の背後にある論理を全体的に「理解」し、データに根ざしたかたちで新しい概念や理論を「発見」できるという点にあり、質的分析で生成された概念や理論は日常生活や現場などの「現実」に密着している」という特徴を持っている（小田, 1999）。質的研究はさまざまな学問領域において行われている（小田, 1999）。なかでも、医学、看護学、教育学においては、実践に従事する医師、看護師、教師の語りや対話を手がかりに、実践の能力の改善に有用な知見がもたらされている（斎藤・岸本, 2003；ベナー, 2004；秋田ほか, 2005）。体育・スポーツ科学の領域においても、有効な研究手法として、採用されるようになってきている（會田, 2008；青山ほか, 2009；村山ほか, 2009）。

経験的学習において臨床の知は語りを通して理解すると身につけやすい（ベナーほか, 2005）。また、事象への密着性、情景の表象化可能性、意味構造への接近性という基準から見ると、事例的な研究は価値が高い（鯨岡, 2005, p.40）。さらに、個別の事例研究から帰納的な推論を経て導き出される運動理論の果たす役割は極めて大きい（村木, 1991）。これらの指摘は、コーチング活動の実践知を知識化するためには、語りとして個別事例を記述し、その個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら、事例の共通の構図、他の現場にも通じる普遍的構図を明示的に描き出すこと（浜田, 2010）が重要であることを示すものであると考えられる。

6. 本研究の目的

球技における代表的なコーチング活動に、ゲーム構想の計画、実践および評価がある（Döbler, 1989）。ゲーム構想は、ゲームの戦い方の具体的な構想であり、個別の攻撃および防御戦術を選択、調整、実施していくための事前計画である。本研究では、大学トップレベルのハンドボールチームを指揮した1名の若手コーチの約9か月間のコーチング活動の中で、特にゲーム構想の計画、実践および評価に着目し、それらに関する語りを質的に分析し、コーチング活動の実践知について明らかにするとともに、球技の競技力の向上に貢献できる知見を導くことを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

対象者は、A大学男子ハンドボール部の2010年度のチーム作りに中心的な役割を果たした若手コーチ1名である。A大学男子ハンドボール部は、P地区学生ハンドボール連盟に所属し、全日本学生選手権大会において、過去5年間で、優勝1回、準優勝1回、3位2回の成績を残している大学トップレベルのチームである。2010年度は、監督がチームを総括する役割を担い、コーチが日々の練習と試合の指揮を行った。チームの方針、目標、練習手段と内容に関しては、監督を中心に、コーチ、キャプテンとの話し合いで決定していた。対象者であるコーチは、選手として全日本学生選手権大会優勝の経験を持ち、大学卒業後は日本リーグに所属するトップチームでプレーしていた。また、(財)日本ハンドボール協会公認コーチ資格を有し、調査期間前までのコーチとしての経験は約1年であった。これらのことは、本研究では、経験豊かな指導者のコーチング活動ではなく、試行錯誤の経験を繰り返しながら、今まさに創り上げている最中のコーチング活動の実践知について検討できる可能性を示していると考えられる。

なお、対象者には、本研究の趣旨を事前に文書にて十分に説明し、調査への協力を得た。インタビュー調査に先立ち、いずれの質問に対しても回答を拒否できることを伝え、調査内容の音声記録に関して了解を得た。調査の趣旨説明からインタビュー実施までの間に、ラポール（桜井・小林, 2005, pp.83-84）の形成に努めた。

2. 調査対象期間

調査対象期間は、2010年度のチームが始動した2009年1月からP地区学生ハンドボール連盟春季リーグ戦（2010年4～5月、9試合、以下春季リーグ戦）を経て、秋季リーグ戦（2010年8～9月、9試合、以下秋季リーグ戦）が終わる2010年9月までの約9か月間である。表1と表2に、A大学男子ハンドボール部の2009年秋季リーグ戦、2010年春季リーグ戦および2010年秋季リーグ戦のゲームパフォーマンス記録を示した。

3. インタビュー調査内容および方法

調査内容は、①春季リーグ戦に入る前、どのような戦い方を目指していたか、②春季リーグ戦において達

表1 攻撃および防御の全体的特徴の変遷

	2009年秋季 n = 9	2010年春季 n = 9	2010年秋季 n = 9
順位	2	6	3
攻撃回数	612	576	603
得点	306	236	280
攻撃成功率	50%	41%	46%
ミス数	145	130	127
ミス率	24%	23%	21%
相手攻撃回数	617	579	605
相手得点	243	208	240
相手攻撃成功率	39%	36%	40%
相手ミス数	171	160	156
相手ミス率	28%	28%	26%

注) 2010年春季は, 攻撃回数と得点が少ないこと, 攻撃成功率が低いこと, 相手の攻撃成功率を低いレベルに抑えていることが分かる。

表2 ポジション別のシュート数, ゴール数, シュート成功率の変遷

	2009年秋季 (n=9)			2010年春季 (n=9)			2010年秋季 (n=9)		
	シュート数	ゴール数	成功率	シュート数	ゴール数	成功率	シュート数	ゴール数	成功率
ポスト	53(12%)	40(14%)	75%	29(7%)	17(8%)	59%	25(5%)	21(8%)	84%
左サイド	29(6%)	17(6%)	59%	18(4%)	7(3%)	39%	37(8%)	22(8%)	59%
右サイド	26(6%)	15(5%)	58%	31(8%)	12(5%)	39%	30(6%)	14(5%)	47%
ロング・ミドル	131(29%)	57(21%)	44%	173(42%)	60(27%)	35%	126(27%)	43(16%)	34%
カットイン	82(18%)	56(20%)	68%	56(14%)	41(19%)	73%	83(18%)	49(19%)	59%
速攻	136(29%)	93(34%)	68%	105(25%)	83(38%)	79%	164(35%)	112(43%)	68%
合計	457(100%)	278(100%)	61%	412(100%)	220(100%)	53%	465(100%)	261(100%)	56%

注) 2010年春季は, 2009年秋季に比べて, ロング・ミドルシュートの割合が大きいこと, ポスト, 左サイド, 右サイドのシュート成功率が低いことが分かる。また, 2010年秋季は, 2010年春季に比べて, ロング・ミドルシュートの割合が小さくなったこと, ポスト, 左サイドのシュート成功率が改善されたことが分かる。

成できたこととできなかったこと, ③秋季リーグ戦に入る前, どのような戦い方を目指していたか, ④秋季リーグ戦において達成できたこととできなかったこと, ⑤春季リーグ戦以降, チーム作りにおいて重要であったと考えているコーチング活動の5つであった。

インタビューの方法は, 半構造化面接を用いた。チーム作りに関する回想を容易にするために, インタビュー調査の約1週間前に, 調査内容に対して自由記述形式で回答を求めるアンケート調査票を対象者に直接渡し, これまでの練習ノートなどを讀んだりして対象期間中のコーチング活動を振りかえって記述してもらった。インタビュー調査時には, それを補助資料として用いた。

メルロ＝ポンティ (1974) は, 研究方法としての対話について, 「私の言葉も相手の言葉も討議の状態によって引き出されるのであって, それらの言葉はわれわれのどちらかが創始者であるというわけでもない共

同作業」と記している。また, やまだ (2000, p.19) は, 対話によって, 「語り語りをよび, 循環的に共同生成される」と述べている。さらに, 西村 (2001, p.209) は, 対話では, 持っているけれどもしまわれているもの, 知っているけれども言葉にできないもの, 経験しているけれども自ら想起できないものを引き出すことが可能になると述べている。これらのことは, 個人の経験を対象とした研究においては, 執筆者自身が自らの経験を記述する方法よりは, 対話を介することではるかに深く広範な体験が得られることを示しており, 研究手法としての対話の有効性を支持している。しかし, 一方で, 語り手と聞き手が対話的關係として, とともに物語の生成に関わる場合, 語られる内容は聞き手の影響を受ける (やまだ, 2000, p.23) ために, 実践知を聞き取る研究においては, 聞き手が語り手と同様の経験を つんでいることが役立つ (桜井・小林, 2005, p.264; 西村, 2001, p.218)。そこで本研究では, チ

ム作りの過程をともに経験した監督とコーチの「当事者間の対話」によって、コーチング活動に関する語りを共同的に産み出すことを試みた¹⁾。すなわち、インタビューの聞き手は、A大学男子ハンドボール部監督が務めた。この監督は、13年間にわたり大学男子および女子チームを指導し、全日本学生選手権大会準優勝5回の実績を持っていた。また、さまざまな質的研究においてインタビューを実施した経験を持っていた(會田, 2008; 會田・松本, 2008; 會田・坂井, 2009)。このことから、本研究では、インタビューの聞き手が対象者の語りを深く理解し、語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点(無藤ほか, 2004, pp.4-5)を持っていたと考えられる。

インタビューの場所は、A大学内の研究室であり、対象者と調査者が1対1で対話できる静かな場所であった。調査は、2010年11月9日に行った。すべての発言はMDレコーダを用いて録音した。

4. テクストの生成

まず、すべての発言内容を逐語録として文章におこした。次に、語りの意味内容を全体として十分理解できるまで逐語録を熟読した。続いて、語りの意味内容をくずさないように、文脈を尊重しながら、①春季リーグ戦前のゲーム構想、②春季リーグ戦の反省・評価、③秋季リーグ戦に向けてのゲーム構想、④秋季リーグ戦の反省・評価の4つの項目にまとめた。つまり、ゲーム構想に基づくコーチング活動を反省し、そこから、新たなゲーム構想を立案する思考過程と、実際のコーチング活動にまとめた。

データの妥当性および信頼性を保障するためにメンバー・チェック(フリック, 2002)を行った。すなわち、調査内容のまとめを対象者に示し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および訂正箇所はないかを確認した。これらの作業を終えたものを研究の基礎資料とした。

得られた基礎資料を精読し、コーチング活動の実践知に関する記述を取り出し、テキストとして再構成した。基礎資料がテキストとして再構成された時に、語りの意味内容が恣意的に変換されていないかどうかを確認するために、本研究に関わっていない2名の研究者に協力を求めた。この2名は、いずれもハンドボールの技術・戦術研究に従事し、きわめて高い指導力を有する指導者であった。これらの手続きによってテキストの信頼性と妥当性を高めた。

5. テクストの分析

本研究の調査内容は、対象者の過去の経験である。「経験は、過去の『その時』に感じたこと、あるいは知覚したと矛盾していたり、その時には全く気づかなかったこととして語られたりもする」(西村, 2001, p.211)。それは、私たちが「一瞬ごとに変化する日々の行動を構成し、秩序づけ、『経験』として組織化し、それを意味づけながら生きている」(やまだ, 2000, p.5)からである。本研究では、変わらずに存在する正確な思い出や事実に固執したり、記憶違いや忘却に苦心したりするのではなく(桜井・小林, 2005, pp.54-55)、やまだ(2000, p.5)や秋田ほか(2005, pp.196-197)に倣い、対象者の語りは、約9か月間にわたるコーチング活動を経験していく中で組織化された経験の語りであり、意味づけられた行為の語りであるとして分析を進めた。なお、分析にあたっては、コーチング学に関する既存の理論をできるだけ保留し、現象学的態度で臨んだ。

Ⅲ. 結 果

以下に、コーチング活動の実践知に関するテキストを示した。なお、テキスト中の()は、調査者の補足を示す。

1. 春季リーグ戦前のゲーム構想

1) セット攻撃の構想

今までの攻撃のパターンや考えを純粋に引き継いでいこうと思いました。それは、ユーゴとか、サイドユーゴとか²⁾、(強い突破プレーを始める)きっかけの動きが決まっています、例えばサイドユーゴならば、サイドからパスをもらうセンタープレーヤーが1対1または2対2を強く仕掛けてチャンスを作るというものです。1対1をしっかり強く攻めて、次の人がそれにどのように合わせるかは、起こったことに周りから意見が出てくるというようなことを日々繰り返していました。

2) セット防御の構想

春は3:2:1防御³⁾を作り上げて、秋には6:0防御⁴⁾も加えるというのが、シーズン当初の予定でした。3:2:1防御の基本的な考え方は今までと同じでしたが、特別大きい選手はいないので、1対1が強くなければだめだと思い、積極的にしっかり前に出て詰めて守るということは意識しました。あと、ボールを奪うことも構想の一つに入っていました。相手の不用

意なドリブルをカットしたり、味方がしっかり1対1を守ってくれて、相手選手がパスしかないという状況をしっかりと早く判断して、パスカットをねらったりすることを意識させ、練習でもたくさん取り組みました。

相手が（攻撃隊形をシングルポストから移行させて）ダブルポストで攻撃をしてきた時に、サイドディフェンスは、9mのラインよりも前まで出てもいいから、近くにいるバックプレーヤーに対して早目にけん制に出て、バックプレーヤー間のパスを緩くするのを手伝うようにしました。サイドにパスが飛ばされた時には、早く戻って守ります。去年までは、相手がダブルポストに入っても、サイドディフェンスは6mのラインに沿ってボールに寄るだけでしたから、サイドの守り方は大きな変更点です。

3) 速攻の構想

速攻は、まずはバランスを取って、自分のポジションを走ることを徹底しようと思いました。ポストとサイドは、いち早く奥（ゴールに近いエリア）を取り、フロントコートに運ぶのは、バックプレーヤー3人にしました。シュートまで持って行くのは、左右のバックプレーヤーが大きいクロスをして、そこにポストプレーヤーが早目にブロックを入れて、利き手側に抜ければシュート、ずらし、ポストが空けばポストという考えでした。

クイックスタート⁵⁾はしないと決めていました。というのは、しっかりと守って、失点しないで速攻を仕掛けるチームにしたいと考えていたので、その練習量を考えた時に、クイックスタートの練習までできるかなというのがあって、守ってからしっかり速攻までの練習でいい、得点はセットオフenseでとると、冬の早い段階で決めました。また、B大学やC大学は積極的にクイックスタートを使ってくると予想していて、そこと「走り合い」のゲームはしたくないと思って、全くトレーニングしませんでした。

4) 速攻防御の構想

速攻に対する防御は、味方がシュート体制に入った時には、相手よりもいち早く戻る準備をしろということを行いました。（中盤でプレスするのではなくて）早く自分たちの（コートの）6mと9mの間（のエリア）まで戻って、自分のマークを取ってから9mよりも前でアタックすることが約束事でした。

2. 春季リーグ戦の反省・評価

セットの攻撃では、自分たちが目指していた、きっ

かけの強い1対1ができなくて、ノーマークをつくることできませんでした。極端な時にはパッシブプレー⁶⁾になったり、（相手ディフェンスを崩せなくて）最後に苦しいところでミドルシュートを撃つことが増えました。

春リーグでは、順位は6位だったんですけど、総失点数が最も少なかったのも、しっかりとセットで守ってゲームを作るところは達成できたと思います。3:2:1防御で、サイドを含めたディフェンスをするというのは、チーム全体として気持ちがまとまってゲームに表れたところですね。あと、ファールしないでボールを奪って速攻につなげるプレー、キーパーからのワンパス速攻とか、ドリブルカットやパスカットからの速攻とかは達成できたと思います。

二次速攻、三次速攻のシュート達成率、成功率が低かったです。相手に中盤でふわふわとマークが付かれた時に、スピードでパーンと前にボールを運ぶことができなくて、また速攻のパターンが1つしかなくて、押そうという気持ちはわかるし、バランスも取れていないことはないんですけど、シュートまで行くようなイメージが全然ないまま春リーグが終わりました。

3. 秋季リーグ戦に向けてのゲーム構想

1) セット攻撃の構想

今振り返ると、春リーグの攻撃は、（攻め方はいろいろあっても、それぞれの攻め方の中で）きっかけのポイントが1つしかなくて、そのポイントのためにパス回しをするというような感じでした。サイドユーゴして、センターにパスをするサイドは広げてパスをするだけです。（前があいていても）攻める意志はないということになります。そういうのが多分ずっと続いていて、選手もそれに何の疑いもなくやっていました。というのは、去年は、それでうまいこと点を取っていたからなんです。でも、去年は気の利く選手がいて、ディフェンスが攻撃の展開を読んだ時には、練習ではあまりしてないかもしれないけど、広くなったスペースを見つけて、ヒュッとカットインして、うまくいっていたんですね。個人戦術に頼った攻撃だったのに、そこが足りなかったんですね。

（春季リーグ戦後の休みが明けて）全体ミーティングをしました。ここでは、監督がセットオフenseの局面を説明し、それを全員で理解することがねらいでした。まず「位置どり」から「ゆさぶり」をして防御を崩しやすい状況にして、次に相手防御を「突破」し

てアウトナンバーを作って、さらにシュートの可能性を持ちながら「展開」し、最後に有利な「シュート」に持って行くという局面の理解です。(突破の)きっかけのポイントが1つではなくて、相手が(突破のプレーに)対応してきても、その1つ前の段階で突破しようというのが(原則として)ありました。このミーティングが、夏以降の攻撃の練習に生きてと思います。また、全体ミーティングでは、これからの攻撃の構想を伝えました。それは、「プレーを継続する中で、常にシュートを狙う。相手チームの防御戦術に応じた、スピードのあるバリエーション豊かなグループ戦術、チーム戦術を展開する」というもので、今までと大きく違うのは、常にシュートを狙うプレーというところです。

このミーティングの後に3年生以下で戦う新人大会があって、この時に、センタープレーヤーにゲームメイクをちょっとでも学んでもらうとしました。局面を理解しながら攻めるとか、この攻撃が効いたから、次はこの攻撃をやってみるとか、そういう相手の嫌なところを突くようなゲームメイクです。

練習場面では、2対2や3対3といった部分練習であっても、最初からサイドユーゴで攻める、センターユーゴで攻めると決めておいて、それぞれの攻撃戦術の中でどこにきっかけを持ってくるかを、ディフェンスの状況を判断しながら、自分たちでつくっていくという練習に変わりました。相手がどう守ってきても、どこからでも攻撃のきっかけができるというような発想に変えて行くということを全員で理解して練習していきました。

もう1つは、展開の局面のところですね。展開の局面に入ってから、どんなきっかけのパターンを使っても、(数的に有利な状況を平行にずらして攻めるといふ)考え方だったので、展開局面のずれた状態の3対3や4対4の練習を、積極的な6:0と消極的な6:0に対するものと、浮いている3:2:1や5:1に対するものをイメージしてやり続けていました。

スターティングメンバーは、センターの選手を去年までやっていた左サイドにコンバートし、センターには新たに2年生を起用しました。展開局面でサイドまでずらしていくのは、左サイドを替えることで、さらに生きてきたと思います。

2) セット防御の構想

春リーグでは3:2:1で守るのがしんどい時間帯が出てきて、しょうがなく(あまり練習していない)6:0を使いました。秋季リーグでは、3:2:1がだめ

でも6:0もあるというレベルに上がるように6:0防御の練習をしました。6:0防御では真ん中の4人が、機械的にピストンするんじゃなくて、ボールを狭い方に持って行くようにけん制をうまく使うというところをポイントにしました。あとは、隣同士の2人で壁を作ってポスト押し上げて、ポストに仕事をさせないような時間をつくって、ほかの人が自分のマークをしっかりと見られる時間を作るようにしました。これは、去年までにはなかった守り方だったと思います。

3:2:1防御も練習していましたが、その考え方や練習方法は、基本的には変えていないです。強い1対1をしっかりと守るとか、ボールを奪うとかです。ただ、サイドディフェンスが、春リーグの時には、早目に、バックプレーヤーにけん制に出ていたんですけど、これはちょっとやりにくいという意見が選手から出たので、近くのポストをマークするくらいボールに寄る、去年と同じ形に戻すことにしました。

3) 速攻の構想

春リーグでは、ボールをフロントコートまでうまく運べなかったのが、なぜだろうと考えたんです。バックプレーヤー以外のプレーヤーが全く絡んでいないからだと思って、ポストとサイドを(速攻に)絡ませようと思いました。相手が(中盤に)ふわふわ出てきているんだったら、その(裏の)スペースが、いっぱい空いているわけだから、そこにポストを走らせればいいじゃないかと考えて、バックプレーヤー3人は当然前をねらうんですけど、その中でポストプレーヤーがシュートを狙える位置にいた時には、そこに(縦の)パスを入れるようにしました。速攻の起点をポストにしたところが、春までとは違ったところです。リーグでは、バツと速く戻るんじゃなくて、ふわふわっと(中盤で)けん制に来て、速攻のリズムを狂わすというようなチームがあるので、そういうチームに対しては、こういう速攻のコンセプトが効くと思いました。そこを徹底して夏に練習しました。

クイックスタートは、得点力が不足していたのと、うちのサイドプレーヤーはスピードがあって、ゲームの局面をしっかりと理解して、今は攻める時間帯、今は止める時間帯というのがわかる選手たちだと思ったので、夏の練習から入れました。攻め方は、去年からやっているような左右のサイドプレーヤーが絡む方法で、最終的に右サイドの方にずらしていこうというようなことに絞ったクイックスタートですね。この中で、相手が早目にサイドとサイドのクロスに対してけん制に来た場合には、サイドとサイドのクロスではな

くて、サイドとサイドの平行で攻めるというバリエーションは持っておくようにしました。もし、2人のサイドプレーヤーが絡む攻め方を相手を読んできたら、違う入り方をして逆のサイドにずらしてシューターを作っていくようにしました。

4) 速攻防御の構想

戻りは、基本的には変えていません。もうずうっと同じことを言っていると思います。

4. 秋季リーグ戦の反省・評価

セットの攻撃は、選手が局面を理解して、どこからでも攻撃が始まるというようなところがチームとして表現できたかなと思います。相手が早目にけん制に出てきたならば、ボールを持っている選手がきっかけになって突破するようなシーンが多かったと思います。また、だれかが突破をした時には、展開の局面に移って、練習し続けたサイドまでずらして持って行く形が自然と出てくるシーンが多く見られて、サイドシュートで終わることが春に比べてものすごく増えました。でも、ずっと一線(6:0防御)で守ってくるチームに対して、途中でアクセントとなるようなステップシュートなり、ランニングシュートなりを打つことが出来なかったことや、サイドまでずらして行く攻撃に相手が慣れてきた時に、その慣れを崩すような攻撃がなかったことが課題です。

セットの防御では、3:2:1防御が崩されるシーンが多かったと思います。春に比べて練習量が少なかったせいか、コンパクトに守る意識がちょっと薄くなって、結果的にトップとか45度のディフェンスの守る範囲が広がって、1対1を突破されてしまったんですね。そういう意識を持とう持とうというのはずうっと言い続けていたんですけど。その時に6:0防御を入れて何とかしのげたと思います。春リーグよりも失点数は増えました。攻撃をメインに練習してきたので、仕方ないかなとは思いますが。

速攻に関しては、ポストプレーヤーとバックプレーヤーが合わせるようなプレーが表現できたところもあったと思います。ポストがきっかけの動きになって、それにバックプレーヤーとかサイドプレーヤーが合わせるような動きができたと思います。まあ、(それは)リーグ終盤の方なんですけれども、それは練習し続けた結果、言い続けた結果かなと思います。

あとはクイックスタートです。クイックスタートを入れたので、当然攻撃の回数が増えました。春よりもかなり得点が増えました。

IV. 考 察

1. ハンドボールにおける効果的なゲーム構想

春季リーグ戦に臨む際の速攻の構想は、「ポストとサイドは、いち早く奥を取り、フロントコートに運ぶのは、バックプレーヤー3人」というものであった。しかし、「相手に中盤でふわふわとマークが付かれた時に、…速攻のパターンが1つしかなくて、…シュートまで行くようなイメージが全然ないまま春リーグ終わり」、全く成果が出せなかった。秋季リーグ戦では、春季リーグ戦の省察に基づき、「相手がふわふわ出てきているんだしたら、そのスペースが、いっぱい空いているわけだから、そこにポストを走らせればいい」と相手の防御に対応して、「速攻の起点をポストにし」、速攻による得点が大幅に向上していった。

また、春季リーグ戦におけるセットの3:2:1防御では、「基本的な考え方は今までと同じ」ではあったが、「相手がダブルポストで攻撃をしてきた時に…」 「サイドにパスが飛ばされた時には…」 というように、相手の攻撃の対応をあらかじめ考慮した、事前の省察に基づきセット防御の構想が組み立てられた。秋季リーグ戦から取り入れたクイックスタートでも、「サイドとサイドのクロスに対してけん制に来た場合には…」 「もし、2人のサイドプレーヤーが絡む攻め方を相手を読んできたら…」 と、予想される相手の対応を考慮していた。その結果、それぞれの局面は、「総失点数が最も少なかったので、しっかりとセットで守ってゲームを作るところは達成できた」 「クイックスタートを入れたので、当然攻撃の回数が増えました。春よりもかなり得点が増えました」と評価されていた。

個別のゲームでは、対戦相手のスカウティング結果を考慮して、基本的なゲーム構想をもとに、対戦相手に応じた個別の戦術が計画される (Stiehler et al., 1988)。本研究の結果は、個別の対戦相手と戦う以前の、シーズン当初のゲーム構想の立案の段階から、自チームが採用するチーム戦術に対して対戦相手がどのように対応するかを想定し、チーム戦術を計画・準備しなければ、成果をあげられないことを示していると考えられる。

2. チーム戦術を自動化させるコーチング活動

マイネル (1983) は、動きの自動化によって選手は負担が軽減され、来るべき困難を先取りするのに自由

な状態になること、可変性を備えないロボットのような動きの機械化は自動化とは正反対であることを指摘している。會田・坂井（2009）は、運動経過が鋳型化すると、対峙する相手選手の行為に対して有効な行為で反応できなくなり、獲得していたはずのコツが消失することを報告している。これらは、いずれも個人の動きに言及したものである。しかし、球技では、個人でもチームでも「相手の行動やゲーム状況に応じて自らの行動を調整」（會田、2006）することが戦術の原則であるために、チーム戦術においても自動化を目指し、機械化・鋳型化を避けることは重要であると考えられる。

春季リーグ戦におけるセット攻撃では、「今までの攻撃のパターンや考えを純粋に引き継いでいこう」とし、「1対1をしっかり強く攻めて、次の人がそれに…合わせる」ことをねらいとしていた。しかし、「きっかけの強い1対1ができなくて」防御を崩せず、「パッシブプレーになったり、…苦しいところでミドルシュートを撃つことが増え」てしまった。また、春季リーグ戦の反省としてコーチは、「きっかけのポイントが1つしかなくて、そのポイントのためにパス回しをするというような感じ」「そういうのが多分ずっと続いていて、選手もそれに何の疑いもなくやっていました」と語っていた。

これらのことは、春季リーグ戦における攻撃が、固定化されたプログラムにしたがって戦術行為が行われるタイプの行動戦略（ケルン、1998）になり、チームの戦術行為が機械化・鋳型化してしまったことを示すものであると考えられる。作業手順をマニュアル化し、同じことを誰がやっても失敗なく行えるような管理手法で行動を定型化すると、「マニュアルを守りさえすれば十分」という錯覚に陥り、あらかじめ想定されていない事態や事故に適切に対応できない（畑村、2000）。春季リーグ戦において前年までの攻撃力が維持できなかった原因として、前年までのチームで成功していた攻撃展開の形の踏襲が「マニュアル化された攻撃」を招き、個々のプレーヤーは対峙する相手との「かけひき」が意識できなくなり、個人戦術の実践知が働かない機械化・鋳型化されたプレースタイルに陥ってしまったこと、その結果、その攻撃展開は早い時機に相手に先読みされ、有効な防御戦術を行使されてしまったことが考えられる。春季リーグ戦の反省および秋季リーグ戦の攻撃構想の立案の過程を見ると、コーチ自身もそれを自覚していたと考えられる。

一方、攻撃力が向上した秋季リーグ戦におけるセッ

ト攻撃は、「常にシュートを狙う。相手チームの防御戦術に応じた、スピードのあるバリエーション豊かなグループ戦術、チーム戦術を展開する」ことを目標にして、「この攻撃が効いたから、次はこの攻撃をやってみる」ことや「相手の嫌なところを突くようなゲームメイク」を目指していた。練習では、「相手がどう守ってきても、どこからでも攻撃のきっかけができる」ことを習得していった。

また、秋季リーグ戦に向けた本格的な練習に入る前に、セット攻撃の局面構造を全員で理解したことが「夏以降の攻撃の練習に生きた」とコーチは回想している。この「攻撃の局面構造の理解」は、攻撃力の向上に2つの意味で貢献したと推察できる。1つ目は、可変性を持たないひとつの「かたまり」として鋳型化した攻撃戦術を意味のある文節に分けて捉えられるようにしたことであり、2つ目は、チームのメンバー全員が、対峙するプレー状況を同じように観察・理解できるようにしたことである。あるプレー状況を「防御を崩しアウトナンバーができた」と理解するプレーヤーと「まだ攻防の均衡は破られていない」と理解するプレーヤーが混在した場合には、次のプレーの意図がプレーヤー間で合わずに、チームとしてプレー状況を計画的・意図的に解決できない。チームの戦術を習熟させていくためには、選手にどのように状況を判断させるかが重要である（會田、1999）。「攻撃の局面構造の理解」は、プレー状況の理解と引き続くプレーに指針を与えるという点に生かされたと考えられる。

その結果、秋季リーグ戦では、「相手が早目にけん制に出てきたならば、ボールを持っている選手がきっかけになって突破するようなシーンが多かった」「だれかが突破をした時には、展開の局面に移って、…サイドまでずらして持って行く形が自然と出てくるシーンが多く見られて…」と評価されるようになった。

Ehret und Späte（1995）は、個々の選手の動きが前もって決められている「フォーメーション」的な攻撃方法から、戦術的なガイドラインをチームで共有しながら、防御プレーヤーの動きに応じて状況的・創造的にプレーする攻撃方法に変化させ、ドイツナショナルチームで大きな成果をあげた。この例は、本研究の結果と考え合わせると、球技において目指されるべきチーム戦術に明確な示唆を与える。それは、プレーヤーの動きやボールの展開を緩やかな約束事としてチーム全体で共有しながらも、プレーヤーが対峙する個々のプレー場面では、個人の判断を優先させていき、他のプレーヤーもそれに対して連動していくこと

が、複雑で多様なプレー状況を解決していく自動化されたチーム戦術であるという示唆である。春季リーグ戦から秋季リーグ戦にかけてのコーチの攻撃構想の変化は、チーム戦術を自動化させるようなコーチング活動に近づいていったことを示していると考えられる。

3. コーチングにおけるゲーム全体と局面との関係性

試合に出場するレギュラーチームのトレーニングは、通常はチーム内の控え選手を相手に行われる。ハンドボールでは、攻防が対峙する4つの局面、すなわちセット防御、速攻、セット攻撃、速攻の防御に分けられる(大西, 1997)。そのために、例えばレギュラーチームのセット攻撃の練習は、控え選手のセット防御に対して行われることになる。

春季リーグ戦のセット防御は、「春は3:2:1防御を作り上げて、秋には6:0防御も加える」という構想のもと、3:2:1防御を徹底することで成果を収めることができた。練習場面では、レギュラーチームの3:2:1防御に対して、控え選手がさまざまな攻撃展開を用いてその弱点を露呈させ、さらにその弱手を補強するトレーニングをレギュラーチームが行うことで防御力が向上していったと推察できる。しかし、控え選手は、レギュラー選手と交代して試合に出場する選手でもある。そのため、チームのゲーム構想を理解し、戦術達成力を高めなければならない。このことは、3:2:1防御を徹底させていくという構想は、チーム内の攻防練習において、レギュラー選手にも控え選手にも3:2:1防御とそれに対する攻撃の徹底をもたらす。

本研究では、3:2:1防御を徹底した春季リーグ戦において、総失点数が最も少ないという評価とうまく攻撃できなかったという反省が得られた。また、3:2:1防御と6:0防御の2つを採用した秋季リーグ戦においては「3:2:1防御が崩されるシーンが多かった…。春に比べて練習量が少なかったせい…。失点数は増えました」という反省と得点力が向上したという評価が得られた。これらの結果から、3:2:1防御の徹底は、結果として、必然的に、3:2:1防御以外の防御に対する攻撃戦術、例えば6:0防御に対する攻撃戦術の準備不足を招いたと解釈することができる。さらに、春季および秋季リーグ戦のどちらでも採用された速攻防御の構想、すなわち中盤でプレスするのではなく「早く自分たちの6mと9mの間まで戻って…から9mよりも前でアタック」という構想は、春季リーグ戦では「中盤でふわふわとマークが付かれ

た」相手防御に対する速攻戦術の未熟さをさらけ出し、秋季リーグ戦においても「ポストがきっかけの動き…ができたと思います。まあ、リーグ終盤の方なんですけれども」と速攻戦術の習熟に時間をかけさせてしまった。

これらの考察から、1つの戦術だけを徹底させることは、局面的には戦術達成力の向上を導くが、ゲーム全体を考えた場合には、必ずしもチームの競技力を向上させることにはつながらないことが分かる。特に、さまざまな攻撃、防御戦術を行使してくる複数の相手と戦うリーグ戦形式の大会においては、特定の戦術のみの徹底は、いくつかの対戦相手に対する不適応を招く危険性があるかもしれない。

V. 要約

本研究の目的は、コーチング活動の実践知について明らかにし、球技の競技力の向上に貢献できる知見を導くことであった。この目的を達成するために、大学トップレベルのハンドボールチームを指揮した1名の若手コーチを対象に、インタビュー調査を行った。特にゲーム構想の計画、実践および評価に関する語りを、現象学的態度を持ち合わせて質的に分析した結果、以下の知見が明らかになった。

- 1) ゲーム構想を立案する際には、採用するチーム戦術に対する対戦相手の対応を事前に想定し、それに対しても効果的なチーム戦術を計画・準備しなければ、十分な成果をあげることができない。
- 2) 球技において目指されるべきチーム戦術の自動化とは、プレーヤーの動きやボールの展開を緩やかな約束事としてチーム全体で共有しながらも、プレーヤーが対峙する個々のプレー場面では、個人の判断を優先させていき、他のプレーヤーもそれに対して連動していくことである。
- 3) 1つの戦術を徹底させることは、局面的には戦術達成力の向上を導くが、ゲーム全体を考えた場合には、必ずしもチームの競技力を向上させることにはつながらない。

付記

本研究の一部は、科学研究費補助金(基盤研究C 課題番号22500562)を受けて実施された。

注記

- 1) 質的研究では、さまざまなインタビューの方法が採用されている。近年では、聞き手は対象者の語りを聞き取るだけの消極的な存在ではなく、語りの産出に積極的に関与する存在として認識され(桜井・小林, 2005, pp.184-186), 「インタビュアーと回答者が共同で知識を構築することに貢献していることを認め、それを意識的にかつ良心的にインタビューのデータの産出と分析に組み込んでいこうという提案」(ホルスタイン・グブリアム, 2004) も出てきている。
- 2) ボールを持たない2人の攻撃プレイヤーがポジションをチェンジするグループ戦術。
- 3) 6名のコートプレイヤーを、味方ゴールに近い方から順に、3名、2名、1名の3列に配置する積極的な防御隊形。
- 4) 6名のコートプレイヤーを、味方ゴールに近いエリアに、横一列に配置する消極的な防御隊形。
- 5) 失点後、素早くスローオフを行い、相手の防御が組織化される前に攻める速攻戦術。
- 6) ゴールをねらう積極的な姿勢を欠く攻撃プレーのこと。パッシブプレーとレフェリーが判定した場合、相手ボールとなる。

文献

- 會田 宏・榎塚正一・土合久男 (1996) スコア分析から見た女子ハンドボール競技における攻撃の特徴. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 43 : 49-54.
- 會田 宏 (1999) 球技の監督にとって戦術とは?. バイオメカニクス研究, 3 : 68-73.
- 會田 宏 (2006) 球技の戦術. (社)日本体育学会 監修 最新スポーツ科学事典. 平凡社 : 東京, pp.178-180.
- 會田 宏 (2008) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究 : 国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに. 体育学研究, 53 : 61-74.
- 會田 宏・松本裕史 (2008) 女性運動選手における競技引退後の身体活動に関する質的研究—競技から健康づくりの運動へパラダイムシフトさせるための提言—. 武庫川女子大学生活習慣病オープン・リサーチ・センター研究成果報告書 (平成19年度) : 286-292.
- 會田 宏・坂井和明 (2009) 国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例研究. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 56 : 69-76.
- 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤 学 編 (2005) 教育研究のメソッドロジー. 東京大学出版会 : 東京.
- 青山清英・越川一紀・青木和浩・森長正樹・吉田孝久・尾縣 貢 (2009) 国内一流走幅跳選手におけるパフォーマンスに影響を与える質的要因と量的要因の関係に関する事例的研究. 体育学研究, 54 : 197-212.
- ベナー : 早野真佐子訳 (2004) エキスパートナースとの対話—ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理. 照林社 : 東京.
- ベナー・フーパー=キリアキディス・スタナード : 井上智子監訳 (2005) 看護ケアの臨床知—行動しつつ考えること. 医学書院 : 東京, p.28.
- Döbler, H. (1989) Grunbegriffe der Sportspiele. Sportverlag : Berlin : pp.170-171.
- Ehret, A. und Späte, D. (1995) Das gezielte Weiterspielen nach Auslöschhandlungen im Angriff — Kern der deutschen Spielauffassung. handballtraining, 7/8 : 19-23.
- 藤林文博 (1997) オレ・オルソン監督によるハンドボールのチーム作りに関する研究. スポーツ運動学研究, 10 : 87-93.
- 藤本 元・榎塚正一・田中 将・會田 宏 (2009) 大学女子ハンドボールにおける攻撃力の評価基準の作成—16年間にわたる縦断的なスコア分析から—. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 258-265.
- フリック : 小田博志ほか訳 (2002) 質的研究入門—(人間の科学) のための方法論. 春秋社 : 東京, p.285.
- 濱田幸二 (2009) バレーボールのチームづくりに関する研究—コーチのスターティングメンバー構想について—. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 42-48.
- 浜田寿美男 (2007) 虚偽自白の心理学とその射程. 認知心理学研究, 4 : 133-139.
- 浜田寿美男 (2010) 現場の心理学はどこまで普遍性をもちうるのか : 渦中の視点, 観客の視点, 神の視点. 日本質的心理学学会第7回大会 大会プログラム抄録集 : 21-23.
- 畑村洋太郎 (2000) 失敗学のすすめ. 講談社 : 東京, pp.60-61.
- ホルスタイン・グブリアム : 山田富秋ほか訳 (2004) アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査. せりか書房 : 東京, p.22.
- 井上尚武・杉山豊人 (2009) サッカーにおけるチームづくりとゲームパフォーマンスに関する研究. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 162-168.
- ケルン : 朝岡正雄ほか監訳 (1998) スポーツの戦術入門. 大修館書店 : 東京, p.97
- 鯨岡 峻 (2005) エピソード記述入門. 東京大学出版会 : 東京.
- メルロ=ポンティ : 竹内芳郎ほか訳 (1974) 知覚の現象学2. みすず書房 : 東京, p.219.
- マイネル : 金子明友訳 (1983) マイネル・スポーツ運動学. 大修館書店 : 東京, 第3版, pp.406-409.
- 箕輪憲吾 (2007) バレーボールのチームづくりに関する事例研究—短期大学女子チームの失敗例について—. スポーツ運動学研究, 20 : 83-95.
- 三浦 健・濱賢次郎・元 炳善 (2009) バasketボールにおける対戦チームのキープレイヤーへの対応について—ディフェンス面での実践事例と反省点—. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 266-274.
- 水上 一・河村レイ子・大西武三 (1999) 大学女子ハンドボールチームでの年間を通してのチームづくりに関する事例研究. スポーツ運動学研究, 12 : 59-78.
- 村木征人 (1991) スポーツ科学における事例研究の意義と役割—コーチング理論と実際の乖離撞着を避けるために—. スポーツ運動学研究, 4 : 129-136.
- 村山孝之・田中美吏・関矢寛史 (2009) 「あがり」の発現機序の質的研究. 体育学研究, 54 : 263-277.
- 無藤 隆・山田洋子・南 博文・麻生 武・サトウタツヤ編 (2004) 質的心理学. 新曜社 : 東京.
- 長野 大・水上 一・河村レイ子・會田 宏 (2010) 最終依存率と最終成功率から選手を評価する試み. (財)日本ハンドボール協会 ハンドボール研究, 12 : 126-130.

- 長岡由起子 (2007) スポーツにおける事例の独自性—事象を異なる水準で捉えることの意義—. スポーツ心理学研究, 34 : 11-21.
- 中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か. 岩波書店: 東京.
- Nicholls, A., Holt, N. L., and Pollman, R. (2005) A phenomenological analysis of coping effectiveness in golf. *The Sport Psychologist*, 19 : 111-130.
- 西村ユミ (2001) 語りかける身体—看護ケアの現象学. ゆみる出版: 東京.
- 野口裕二 (2005) ナラティブの臨床社会学. 勁草書房: 東京, pp.21-22.
- 小田博志 (1999) ドイツ語圏における質的健康研究の現状. 日本保健医療行動科学会年報, 14 : 223-239.
- 大西武三 (1997) ハンドボールのゲームにおける局面の構成について. 筑波大学体育科学系紀要, 20 : 95-103.
- 西條剛央 (2007) ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編. 新曜社: 東京, p.10.
- 斎藤清二・岸本寛史 (2003) ナラティブ・バースト・メディスンの実践. 金剛出版: 東京.
- 桜井 厚・小林多寿子編著 (2005) ライフストーリー・インタビュー. せりか書房: 東京.
- Stiehler, G., Konzag, I., und Döbler, H. (1988) Sportspiele. Sportverlag: Berlin, pp.100-101.
- 田中 将・樫塚正一・會田 宏 (2010) シュートエリアからみた女子ハンドボール競技における攻撃の特徴—世界選手権を対象として—. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 57 : 103-107.
- 山崎 治・三輪和久 (2001) 外化による問題解決過程の変容. 認知科学, 8 (1) : 103-116.
- 吉田敏明 (1993) チームづくりに関する事例研究—大学女子バレーボールチームの場合—. スポーツ運動学研究, 6 : 11-22.
- 吉田敏明 (1996) バレーボールにおけるサーブプレシープフォーメーションの変更に関する研究—5人W型及び4人N型から5人逆W型への移行—. スポーツ運動学研究, 9 : 29-41.
- 吉井秀邦 (2010) サッカーにおけるチーム作りに関する一考察—躍進するエクアドルサッカーの原点を探る—. 順天堂スポーツ健康科学研究, 1 : 426-439.
- やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学. やまだようこ編 人生を物語る. ミネルヴァ書房: 京都.
- 岡子浩二 (2010) スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性. スポーツ方法学研究, 23 : 99-104.

平成23年 1月 6日 受付
平成23年 1月 14日 受理